

Que Será, Será

VOL.2
1995
EARLY
AUTUMN



伊藤 愷 撮影 「フォンテンブローの女」

第一四八回米国精神医学学会参加記

なごやメンタルクリニック院長 貝谷久宣

この五月二〇日より五日間患者さんには迷惑をかけてしまいました。クリニックを代診の先生にお願いして米国精神医学学会に出席しました。私は一九八八年からこの学会の海外特別会員になりましたが、この学会は入会資格がたいへん厳しく、三年に一回は出席しないと会員の資格を失ってしまうのです。今まで、ニューヨーク、サン・フランシスコの会に参加し、今回はフロリダ州マイアミです。

現地についた翌日の夕方、マイアミ・ビーチ沿いのホテルで不安障害のシンポジウムがありました。パニック障害生みの親であるニューヨーク精神医学研究所長のクライン教授がメイン・スピーカーの一人であるので予定通り出席しました。少し遅れて会場に到着すると五〇〇人以上の人が押しかけて超満員で席もプログラムも既にありませんでした。途中で一つだけ空いた席をなんとかみつけると、偶然とは奇なもので、こんな

に多くの人の中で、それも日本からの出席者は一〇人にも満たないというのに、空席のとなり座っている人は帝京大学神経精神科の竹内龍雄教授でありました。挨拶もそこそこ、クライン博士の講演を聞きました。いままで文献で読んで一応は知っていたつもの、彼のパニック障害の成因に関する仮説を直接聞いてみるとたいへん新鮮に感じるので。やはり学会に出席してよかったですと思いました。

私の米国精神医学学会の参加も今回は三回目になるので、ポスター・セッションで演題を発表しました。いままで国際学会では何度も演題を出し発表したり座長も務めました。が、海外の国内学会での発表ははじめてです。ポスター・セッションというのは、研究内容をわかりやすく図表で示したポスターを二×一・五mほどのボードに張り半日間展示しその前に立つのです。ポスター・セッションのよいところは、その研究に興味をも